

★ 上関町と朝鮮とのつながりを紹介しよう

地域の歴史的・文化的遺産について興味を深める子ども

上関町に到来した朝鮮通信使にまつわる話を調べることにより、地域の歴史的・文化的遺産について興味を深めることができるようにする。

教材について

上関町は、江戸時代に朝鮮通信使が立ち寄った場所である。右の朝鮮通信使が停泊する港の様子を描いた絵（ユネスコ記憶遺産に登録）の模写が学校の校長室に飾られていたり、町総合文化センターのホールの緞帳どんちようの図柄になったりするなど、町内各所で見られる。平成30年度には、本町で「朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会」が開催されるため、このような機会をいかし、朝鮮通信使がどのような役割を担っていたかということに興味をもたせたい。



朝鮮通信使船上関来航図

展開例

学習の流れ	単元づくり・授業づくりのポイント
① 国語科「三年とうげ」が朝鮮の民話であることから、「朝鮮通信使上関到来まつり」に注目させ、調べ学習を行う。	◇ 「三年とうげ」を劇の台本に書き直して劇を行ったり、並行読書した朝鮮の物語を紙芝居にしたりすることで、朝鮮の文化に関心をもたせる。
② 「朝鮮通信使上関到来まつり」で中心となっている教育委員会の担当者から、その由来や、上関町に残る朝鮮通信使にゆかりのある場所について教えていただく。	◇ 社会科において、町の伝統的な祭りと比較することで、それぞれの目的や担っている人々が異なることに注目させる。そうすることで、「朝鮮通信使上関到来まつり」は、朝鮮や通信使のことを広めることがねらいであることに気付くことができるようにする。
③ 朝鮮通信使にゆかりのある場所を訪れ、自分の日常生活とのつながりが深い場所であることに注目する。	◇ 町内に2か所ある保育園のどちらもが、朝鮮通信使をもてなした寺であるため、本校のほぼ全ての子どもが通信使にゆかりのある場所に関わりがあることに注目させ、みんなに伝えたい気持ちを醸成するとともに、学習発表会に向けての動機付けにする。
④ 学習発表会に向けて、上関町と朝鮮通信使とのつながりをまとめる。	◇ 音楽科「節づくり」において、日本の「ヨナ抜き音階」と共通することに気付き、それをういて劇「三年とうげ」のBGMをつくる。
⑤ 学習発表会において、地域や家庭、他学年に向けて伝える。	

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

③ 学習過程の工夫

国語科を中心に、社会科、音楽科、総合的な学習の時間、道徳と、横断的・総合的に学習を進める。そうすることで、学習発表会に向けての調べ学習にとどめず、各教科等のねらいに沿って言語活動の目的にすることができるようにする。

④ 体験的な学習の充実

物語のリライト、要約、朗読、劇、外部人材へのインタビュー、節づくりといった活動を通して、学習の目的が明確になることで、学習への意欲を高めることができるようにした。

⑤ 外部人材の活用

教育委員会や寺の方や、歴史的な建物を管理される方など、多くの外部人材を活用した。

★ 赤間硯を使った習字教室

豊かな心と郷土に対する誇りを育む子ども

ふるさとの伝統的工芸品の本物に触れ、作品を制作する活動を通して、児童にふるさとに対する誇りや豊かな心を形成する。

※学習指導要領：伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（2）書写に関する事項に対応

教材について

赤間硯の原石である赤間石は現在、宇部市北部の万倉（まぐら）の奥地で採掘されている。歴史は古く、鎌倉時代に鶴岡八幡宮に奉納されたと言われている。

江戸時代には藩主の命令で採掘され、硯職人も多かったが、現在は後継者不足で、宇部市では4軒のみとなった。

ふるさとが誇る伝統工芸品に早い段階から触れることで、芸術作品への関心を高め、芸術への感性を磨くとともに、豊かな心と郷土愛を育む授業になる。



展開例

学習の流れ

- ① 赤間硯の歴史，制作の工程を知る。
- ② 習字道具について学ぶ。
- ③ 墨をする。
- ④ 小筆を使って半紙に名前を書く。
- ⑤ 墨をする。
- ⑥ 大筆を使って一人一文字を書く。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ DVDやふるさと副読本などを活用し，赤間硯についての基礎的な知識や地域の伝統工芸品であることなどを教える。
- ◇ 静かに墨をすることで，心が落ち着き，字を書くことに集中している自分に気付かせるようにする。
- ◇ 児童が書いた字は唯一無二の自分だけの字であることを評価し，児童の自己肯定感を育てる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

自身の表現力や自己形成に役立つ年齢と言われていることなどを，共通理解している。また，高学年は他の学校行事との兼ね合いもあるため，毎年，中学年で実施している。

③ 学習過程の工夫

赤間硯を使った習字を楽しみ味わうことに学習の重点を置く。また，習字の講師による実演や実技指導に取り組むことにより，興味・関心や学習意欲を高める。さらに，習字道具の説明や準備，片付けまでを一連の授業とすることで，道具を大切にすることを育む。

④ 体験的な学習の充実

地域の伝統工芸品の本物に触れることで，学習意欲を喚起する。

⑤ 外部人材の活用

地域から習字の講師を招き，習字教室を実施している。また，地域の赤間硯作家に硯の修理等のメンテナンスを委託している。

★ 干拓で土地を広げる～高泊開作～

郷土に対する誇りと愛着をもつ子ども

郷土の発展のために先人が行った業績を調べる活動を通して、先人の苦労や願いを捉えるとともに、郷土に対する誇りと愛着をもつことができる。

※学習指導要領：第3学年及び4学年 内容(5)ウ に対応

教材について

高泊開作は、萩藩直営事業(船木代官楊井三之允が指揮)として行われた周防長門地区内近世最大規模の開作である。この開作は高泊湾の干拓事業で、海水を堰き止める堤防の製造中も再三決壊したが、様々な工夫や努力の結果、1668年に完成した。浜にある5挺の唐樋は、その当時に作られた排水用樋門で、潮の干満で生じる自然の水圧を利用して開閉する招き戸など当時の工法を伝える貴重な遺構であり、国指定史跡となっている。



展開例

学習の流れ

- ① 1600年頃と現在の山陽小野田市の地図を比較し気付いたことを話し合う。
- ② 干拓の方法とその理由について本で調べたり、様々な場所を見学したりする。
→ 資料・歴史民俗資料館見学・高泊神社や勘場屋敷、唐樋見学
- ③ 調べて分かったことをまとめる。
- ④ まとめたことを発表し、先人の苦労や願いについて考える。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 2枚の地図を用意し、課題を練り上げる。
- ◇ 史跡に詳しい地元の方と一緒に高泊神社のいわれや龍王島・勘場屋敷の説明を聞く。
- ◇ 歴史民俗資料館で当時の工事の様子等の展示物を見学する。
- ◇ 調査結果とそこから考えたこと等について文章や地図・年表を使ってまとめる。
- ◇ 失敗を繰り返してもあきらめずに開作を完成させた先人の思いとその後の様子に触れる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
中学年で扱う内容が重ならないように、3年生は「校区探検」という観点から校区にある史跡を扱い、4年生になって歴史的な背景等を詳しく学ぶようにする。
- ③ **学習過程の工夫**
最初に2枚の地図を提示することで、現在との違いをしっかりと認識させ、「なぜ・どうやって開作したのか」等、単元全体を見通した課題をもたせるようにする。
- ④ **体験的な学習の充実**
高泊神社・龍王島・勘場屋敷・浜五挺唐樋はいつでも見学することが可能なので、実際に見学して、当時の様子(波に削られている場所等)を見て感じるようにする。
- ⑤ **外部人材の活用**
学校支援ボランティアの中に、高泊開作の文化史跡に対して高い見識をもつ人がいるので、毎年見学の際は、児童への説明をお願いしている。高泊神社の宮司にも事前に見学の意図を伝えておくことにより、意図に沿った説明を聞くことができる。児童も、副読本に記載されていることに基づく説明なので、大変勉強になったと感想を述べている。説明を聞くことを通して、地域の方がもっているふるさとを愛する心が、児童に伝わるのが期待される。

★ 福賀スイカのおいしさのひみつにせまろう！

ふるさとのよさを見つめ直すことができる子ども

スイカの甘さと大きさにこだわりをもって働いていらっしゃる農家の方から、スイカ作りについて学ぶことを通して、自ら課題を見付け、課題を解決していく力を身に付けると同時に、ふるさとのよさを見つめ直すことができるようにする。

教材について


減反政策により米作りができなくなった土地を再利用しようと始まったのが、福賀のスイカ作りである。一株一果取りで作られる福賀のスイカは、とても甘く大きいことで有名で、やまぐちブランドにも指定されている。

毎年、子どもたちは、スイカの出発式に出席しており、日頃からよく食べることから、子どもたちに馴染みのある題材といえる。一方で、スイカ作りを体験したことのない児童がほとんどであるため、そのおいしさの秘密にせまるという学習は、児童の主体的な学びを促すことができると考える。



展開例

学習の流れ

- ① ふるさと自慢について話し合う。
- ② 福賀スイカの作り方を農家の人から学び、スイカを作る。
 ②と③を繰り返す。
- ③ 疑問については、農家の人に質問して解決する。
- ④ 学習発表会で、学んだことを発表する。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 教職員が、スイカ農家の方と事前にしっかりと打ち合わせをする。
- ◇ 主体的な学びを促すために、地域のスイカ農家の農場と学校の畑の2か所でスイカを作ることにした。農場でスイカの栽培方法を学び、学校に戻って今度は自分たちだけで育てるサイクルで単元を構成した。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

スイカ栽培は、時期によっては活動時間が朝や放課後になるということを、学校全体で事前に共通理解を図った。

② 教育課程への位置付け

毎年3・4年生の総合的な学習の時間では、地域の特色を生かしてふるさとの農産物についての学習を行っている。スイカだけでなく、梨やほうれん草など、年度によって児童が様々な体験学習ができるように工夫している。

③ 学習過程の工夫

4年生の国語「新聞を作ろう」において、体験をもとに「福賀スイカ新聞を作ろう」というオリジナルの単元を設定した。学習内容は教科書どおりだが、自分たちが興味をもって調べているスイカ作りの記事を書くという活動は、子どもたちの主体的な書く活動につながった。また、作成した新聞は福賀スイカ部会の会長さんに見ていただいた後、阿武町役場の協力を得て、阿武町の全世帯に配布した。

⑤ 外部人材の活用

福賀スイカ部会の会長さんの協力を得た。

★ 「伝統塾」～田植ばやし・神楽舞の取組を通して～

ふるさとのよさを知り、ふるさとの伝統を伝えようとする子ども

須佐に伝わる「田植ばやし」「神楽舞」の継承活動を通して、須佐のよさを知り、須佐の伝統を伝えようとする児童の育成を図る。

教材について

「田植ばやし」は、田植えの際、子どもも高齢者も一緒になって、豊作を願うために行われた伝統芸能の舞である。

また、「神楽舞」は、水害を「オロチ」、生活を守る象徴を「スサノオノミコト」に例え、自分たちの生活を守ることを願うために行われた伝統芸能の舞である。

地域の指導者の協力のもと、須佐に伝わる伝統芸能を練習し、地域の祭や地域施設の行事等で披露することを通して、「めざす子どもの姿」に迫ることができると考える。

さらに、3～6年生の総合的な学習の時間で取り上げたことで、児童の「須佐の伝統が分かった。」や「須佐のことをもっと知りたい。」等の思いや願いを引き出すことができると考える。



展開例

学習の流れ

- ① 「田植ばやし」「神楽舞」の継承活動の意図について理解する。
- ② 地域の指導者の方との練習に取り組む。
- ③ 地域の祭りや地域の施設での催し行事で披露する。
- ④ 取組の振り返りを行う。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 須佐に伝わる伝統芸能に対する児童の考えを確認する。
- ◇ 地域の方々への感謝の思いをもたせる。
- ◇ どのような思いをもって披露するのかを、事前に確認する。
- ◇ 取組の価値を共有する。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
須佐の伝統芸能継承活動の取組の意図を全教職員で共通理解する。特に、3～6年生での取組のため、該当学年の担任との共通理解は年度当初に行う。
- ② **教育課程への位置付け**
3～6年生の総合的な学習の時間として1～2学期に取り組む。地域の祭りや地域施設での催し行事で披露する。
- ③ **学習過程の工夫**
「田植ばやし」「神楽舞」の取組を、道徳と関連付け、道徳的価値の充実を図るようにする。
- ⑤ **外部人材の活用**
伝承活動の地域の指導者のみならず、活動を充実させるために公民館の方の力を借り、地域との連絡調整を行っていただいた。

★ 地域の伝統文化を守ろう～東荷神舞～

郷土への愛着や伝統文化の継承への意欲をもつ子ども

郷土の伝統芸能を体験したり発表したりすることを通して、地域の伝統芸能の継承者としての自覚を高めるとともに、郷土への愛着や伝統文化の継承への意欲をもつことができる。

※学習指導要領：クラブ活動 に対応

教材について

東荷神舞は、五穀豊穰と悪魔退散を祈願し、大正12年から、東荷神社に奉納されている舞である。戦争で一時中断したが、昭和53年、東荷神舞保存会が発足し、東荷神舞が復活した。

本校の児童は、クラブ活動の時間、保存会の方と一緒に、神舞の一つ「天の岩戸」を練習し、代々受け継いでいる。地域の伝統文化の継承者としての誇りをもち、文化祭や地域の行事で披露している。また、地域の大先輩との交流の場となっている。



展開例

学習の流れ	単元づくり・授業づくりのポイント
5月～ 役割決定、神舞の練習 9月 神舞の発表 ・地域の施設訪問 ・敬老会 10月 神舞の練習 11月 神舞の練習 12月 神舞の発表 ・東荷ふれあい文化祭	◇ 保存会の方の話を通して、神舞に込められている願いや、受け継いできた人々の思いについて理解できるようにする。 ◇ 地域行事での発表により、伝統文化の継承者としての自覚と誇りを、地域全体で育成できるようにする。 ◇ 児童相互の交流が進むよう、配役や練習の役割分担を話し合わせて決めるようにする。 ◇ 保存会との連絡調整を密に行うことで、練習や発表のねらいを共通理解できるようにする。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

本校の伝統的な教育活動として根付いており、児童、保護者、地域が神舞の伝承について理解している。

② 教育課程への位置付け

特別活動（クラブ活動）として教育課程に位置付け、練習と発表の場を計画している。春から練習を始め、秋には地域で発表する。

④ 体験的な学習の充実

児童数の減少で、現在では3年生から参加している。4年間続けることにより、舞の振り付けも覚えていく。上学年が下学年に振り付けや着付けを教えるので、児童の交流の場にもなる。最高学年になると鬼役や姫役ができることも、児童のあこがれとなっている。

⑤ 外部人材の活用

毎回、地域の保存会メンバーが講師として、舞の指導、演奏をしている。衣装の付け方についても、東荷神舞保存会の指導と協力を受けている。

★ 安下庄を調べよう

歴史あるふるさとを愛する心をもつ子ども

宮本常一の写真を調べることを通して、自分たちの住んでいる地域の伝統や文化、昔のくらしの様子についての関心を高め、歴史あるふるさとを愛する心をもつことができる。

教材について

周防大島町出身で日本を代表する民俗学者である宮本常一は、徹底して自分の足で歩き、疑問を自分の目や耳で確かめていく、「あるく、みる、きく」ことを生涯貫いた民俗学者であり、自分が生まれ育った故郷の写真をたくさん残している。常一の功績からは、実際に自分の五感を使って情報を得たり、疑問に思うことを確かめるために足を運んだりすることの大切さを学ぶことができる。本単元では、宮本常一の調査方法である「あるく、みる、きく」活動を行い、疑問に思うことを自分たちで調べることの楽しさを味わうことができるようにする。

宮本常一は、周防大島町を心から愛し、ことあるごとに島に帰り、地域の調査をし、より深く周防大島の歴史や生活文化を知ることにも努めたと言われている。それらの写真の中に子どもたちの住む安下庄地区の写真もある。常一が撮った写真を基に地域の移り変わりを調べたり、家族や地域の人たちに当時の話を聞いたりする学習を通して、実際に自分たちで集めた情報を基に課題を解決していく楽しさを味わうとともに、地域へ出て、聞き取り調査を行うことを通して、コミュニケーション能力を育むことができる。



展開例

学習の流れ

- ① 地域を探検し、気付きや疑問を出し合う。
- ② 長尾八幡宮の写真を見ながら意見交換を行い、調査内容を決定する。
- ③ 情報収集を行う。
あるく・みる
→現地に行って確かめる。
きく
→長尾八幡宮の宮司さんや家族に聞く。
- ④ 調べたことを基に、これからの安下庄について考えた結果を一冊の本にまとめる。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 気付きや疑問に思うことについて児童が話し合う時間を多く取り、主体的に調査活動を計画させるように工夫する。
- ◇ 町探検で多くの児童が興味をもった鳥居を取り上げ、宮本常一の写真を提示する。
- ◇ 八幡宮の取材を通して、ハワイへの移民について知り、新たな課題として出てきた周防大島町とハワイの関係について調べる活動を設定する。
- ◇ 調べたことを他者に伝えたり、考えをまとめたりすることで、課題に対する考えを深め、次の活動への意欲を高めていく。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

④ 体験的な学習の充実

実際に自分たちの校区を探検しながら課題を見つけていく活動を取り入れることで、課題に対する意欲を高めることができた。長尾八幡宮について調べる活動においても、初めから宮司さんに取材するのではなく、子どもたちだけで鳥居の様子を調べ、その時に疑問に思ったことを宮司さんに取材をするというやり方を行った。児童は、一度だけでなく、何度もその場所に行って調べていくことで、さらに詳しく情報を得ることができることを実感できた。

⑤ 外部人材の活用

学習の前に、周防大島文化交流センターの学芸員の方に、宮本常一についての講話を行っていただいた。その中で、自分たちで考えた課題を調べるときのポイントも教えていただいた。教えていただいたことを、その後の情報収集の活動で生かすことができた。

★ 地域の伝統芸能を学ぶ（周南市安田の糸あやつり人形芝居）

自己の生き方を考えることができる子ども

地域の人や伝統芸能（周南市安田の糸あやつり人形芝居）との関わりにおいて、自らの生活や行動について考えていくことができる。学んだことを、故里に生きる一員として、現在及び将来の自己の生き方につなげて考えることができる。

教材について

「周南市安田の糸あやつり人形芝居」は、県指定無形民俗文化財であり、この地域に200年以上継承されてきた伝統芸能である。

学習する演目は、「傾城阿波の鳴門」である。親子の固い絆を描いた人情芝居である。人形芝居には、人形あやつり、語り、三味線の三つの役割が必要であり、本校では、5年生がそれぞれの役割を分担して一つの作品を作りあげる。



展開例

学習の流れ

- ① 三丘小人形芝居引継ぎの会（3月）
6年生から人形芝居の伝統を引き継ぐ。
- ② 役割分担決定・稽古開始（5月）
- ③ 外部講師を招聘しての特別稽古（8月）
夏季休業中の稽古のまとめとして、児童クラブで稽古の成果を披露。
- ④ やまぐち徳地伝統芸能祭り、熊毛文化祭・学校バザー等で発表
- ⑤ お礼の会及び引継ぎの会（3月）

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 6年生から伝統を守る気持ちを引き継ぎ、意欲を高める。
- ◇ 10月の発表に向けて一人ひとりが課題意識をもちながら稽古に臨めるよう、稽古帳を作り、課題や反省を記入させる。また、稽古終わりには、全員に反省を発表させる。
- ◇ 発表することで自信と達成感をもたせる。他団体との交流も実施。
- ◇ 感謝の気持ちを表現させる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
安田の糸あやつり人形芝居についての基礎知識や、これまでの取組について、4月の職員会議において全職員が共通理解し、学校の教育活動として取り組むことを確認する。
- ② **教育課程への位置付け**
5年生の総合的な学習の時間に位置付け 5月～11月週2時間（50時間）
- ③ **学習過程の工夫**
11月に大きな舞台で発表するという目標をもたせることで、子どもたちの意欲の継続を図る。また、上の学年から下の学年への引継ぎの会を設定することで、伝統文化の継承を体験させることができる。
- ④ **体験的な学習の充実**
語り、人形あやつり、三味線それぞれの役割を全て子どもたち自身が分担し、指導を受けながら身に付けていく。また、発表時には、袴、袴を着用し、舞台上がり、子どもたちだけで演目を披露する。
- ⑤ **外部人材の活用**
三丘小糸あやつり人形浄瑠璃芝居発足時から、地元の保存会の全面的な協力を得ている。練習日には、毎回10人近くの会員が子どもたちの指導に当たっている。また、発表時の舞台の設置及び主催者との連絡調整も保存会が主となり行っている。

★ 歌舞伎に親しもう（4年）・歌舞伎のよさを伝えよう（5・6年）

主体的に伝統を守ろうとする意欲と故郷に対する誇りと愛着をもった子ども

古くから地域で受け継がれてきた伝統文化に触れ、女歌舞伎保存会の方々との交流を通して、伝統を守る喜びと難しさを体験し、地域への誇りと愛着の心を育てる。

教材について

本地域には、県無形民俗文化財の指定を受けた「俵山女歌舞伎」が江戸時代から伝承されてきた。本校では、平成17年度からこの女歌舞伎の伝統芸能を「俵山子ども歌舞伎」とし、総合的な学習の時間を活用して体験的な学習に取り組んでいる。

女歌舞伎保存会の指導を受け、「白浪五人男」の演目を練習して4月の「温泉祭り」でデビューした後、さらに練習を重ねて、11月の「文化産業祭」で学習の成果を地域の方々に披露している。年間を通して、地域の伝統を守り受け継ごうとする学習を行うことにより、地域の方々から賞賛の言葉をいただいている。また、地域と学校が一体となり互いに関わりを深めることで、児童は伝統を受け継ぐ責任と意欲や郷土愛を高めることができ、郷土に対する強い愛着と誇りをもつことができると考えている。



展開例

学習の流れ

- ① ビデオを見て、これまでの様子を確認し、言い回しや動きを練習する。
- ② 「温泉祭り」で初上演を行う。
- ③ 役の細かな動きについて互いに意見を伝え合いながら、よりよい動きになるように練習する。
- ④ 「俵山地区文化産業祭」で上演を行う。
- ⑤ 児童の配役希望を参考にして次年度の配役を決定し、次年度への意欲を高める。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ ビデオを鑑賞し、台詞の言い回しや動きを工夫し、保存会の方の指導を受ける。
- ◇ 発表を通して、伝承の意義を感じ取り、取組への意欲を更に高めるよう工夫する。
- ◇ 互いの動きを確認し合いながらよりよい動きをめざすことで、自信をもたせる。
- ◇ 今年度の成果を精一杯発揮させ、達成感をしっかりと味わわせる。
- ◇ 次年度への準備と心構えをもたせる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
教育目標の重点項目に伝統文化の継承を位置付け、地域担当教諭が女歌舞伎保存会や地域の方との連絡調整を行って子ども歌舞伎の練習・上演計画を立案し、全校体制で実践する。
- ② **教育課程への位置付け**
4～6年は総合的な学習の時間に「ふるさと学習歌舞伎」の練習時間を位置付け、年間25時間を確保している。1～3年は、ミニ子ども歌舞伎として親しむようにしている。
- ③ **学習過程の工夫**
伝統文化を重んじる意識を高めるために、毎時間、礼儀作法にも注意を払い、1時間の練習に個人と全体の練習を取り入れてメリハリのある学習内容になるように心がけている。
- ④ **体験的な学習の充実**
かつらや化粧、着物等の本物を活用したり昔の言い回しの台詞を体験したりすることで、日常生活とは違う実体験ができ、伝統の重みを実感することができる。
- ⑤ **外部人材の活用**
俵山女歌舞伎の座長や地域の方々が積極的に関わってくださり、児童に直接指導いただける人材の環境が整っているが、今後、後継者の育成が大きな課題である。

★ 佐賀の幸 親子料理教室

地域よさを実感するとともに、地域が抱える課題について理解を深める子ども

地域のボランティアを指導者に迎え、佐賀地域の食材を使って親子で楽しく料理を作り、食事をするることにより、地域の食材に親しみ、よさを実感する。また、地域の食文化を継承する人々の生き方に触れることにより、佐賀地域のよさや課題を知り、今後自分が何をすべきかについて考える。



親子ともに地域の方から、文化を伝えてもらう伝統的行事

教材について

当日の献立



○けんちょう ○ちしやなます ○さしみ
○魚ハンバーグ ○イワシのかき揚げ
○えそとはものミンチ入り味噌汁
○ごはん ○みかん

本校の近くに佐賀漁港がある。近年では、漁業に従事する人々の減少とともに、漁獲量も減少の一途をたどっている。

佐賀に住みながらも、漁業に触れる機会の少ない児童が地域食材や人々のよさに触れ、実感を伴う理解を通して、地域の課題について考えることができ、「ふるさとを愛する心」の醸成につながる教材である。

本校で長年続いている、伝統的な授業である。

展開例

学習の流れ

- ① 開会行事（校長あいさつ、指導者紹介）
- ② 4班に分かれて調理
- ③ 実食
- ④ 閉会（お礼のあいさつ）
- ⑤ 片付け（みんなで一緒に）
- ⑥ 振り返り（お礼の手紙）

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ あいさつの中で「ふるさとを愛する心の育成」の重要性について触れる。
- ◇ より多くの感動体験を味わえるよう、魚をさばいたり、タコをゆがいたりする実習などをできるだけ児童の手で行うよう工夫する。
- ◇ 実食の際には、郷土料理や食材についてお話をさせていただくよう、事前に地域の方々に依頼しておく。
- ◇ 地域に対してこれからできることについて考える振り返りの時間を確保する。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

③ 学習過程の工夫

事前の学習として、町教委作成資料「わたしたちのまち ひらお」での社会科学習（3年時）を想起させる。事後の学習として、かかわっていただいた方々へ手紙を書くとともに、佐賀に住む地域の一員として自分ができることについて考えさせる。

④ 体験的な学習の充実

実際に子どもたちが生きた食材に触れたり、実際に調理をしたりするなどの、体験的な活動を多く仕組むことで、感動体験や実感を伴う理解を図る。

⑤ 外部人材の活用

地元の漁協担当者や生活改善実行グループの方々に協力をいただき、地域のよさや課題に直接関わる場を設定する。



生きているタコを見た児童たち「ヌメヌメしている」「吸盤がひつつく」などの歓声が上がる

★ 受け継ごう！王司かざぐるま

郷土への愛情と誇りを育む子ども

王司地区に伝わる「王司かざぐるま」の歴史を知り、製作することを通して、郷土への愛情と誇りを育てる。

教材について

竹で作られている「王司かざぐるま」は、江戸時代に伝えられた京都文化の一つである。一時は途絶えていたが、地域の人々が試行錯誤の末、復活した。素朴で鮮やかな色彩と独特の質感・あたたかさを感じる「竹製かざぐるま」であり、伝統や文化の継承・普及促進という点から注目を集めている。

最近では、世界スカウトジャンボリーで外国のスカウトと一緒に王司かざぐるま作りをしたり、「王司かざぐるまクラブ」を立ち上げたりするなど、発表・交流の場が増えている。

王司かざぐるまを通して、美しい海に面した緑豊かなふるさとのよさを感じるだけでなく、郷土を誇りに思い、いつまでも郷土を愛する心を育てていくことにつながるものと考えられる。



展開例

学習の流れ

- ① 視聴覚教材により、「王司かざぐるま」の歴史、編み方の概要を知る。
- ② 「王司かざぐるま同好会」のみなさんをお招きして「王司かざぐるま教室」を開催する。
 - ・竹ひごの持ち方に気を付ける。
 - ・4本の竹ひごを組み、編んでいく過程を確認しながら作業する。
- ③ 会のみなさんにお礼の手紙・感想を書く。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 「王司かざぐるま同好会」による視聴覚教材をもとに、事前に担当が授業時間に王司かざぐるまの歴史や編み方を説明した。
- ◇ 「王司かざぐるま教室」では5～6人の班に一人の担当講師が指導した。「王司かざぐるまクラブ」の児童を班のリーダーとして、作業がスムーズにいくように指導者の補助をするように伝えておく。
- ◇ 感謝の気持ちを込めて手紙を書く。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

王司地域に伝わる「伝統民芸品」で、学校内のいたるところに「王司かざぐるま」が見られる。また、特別支援学級の一つが「かざぐるま」という名称を使用していることもあり、認知度は高い。

② 教育課程への位置付け

5年生の総合的な学習の時間に年4時間、12月に実施することを位置付けている。

③ 学習過程の工夫

「王司かざぐるま」に込められた思いや願いが児童にしっかりと伝わるように、社会科の伝統工芸品の学習や国語科の地域の人材を友達に紹介する学習でも、「王司かざぐるま」を取り上げている。

④ 体験学習な学習の充実

保護者世代にも、ふるさとの伝統民芸品に接する機会をもってもらうために、学年PTA活動として位置付け、児童と一緒に製作した。

⑤ 外部人材の活用

毎月、王司公民館で行われている「王司かざぐるま同好会」の会議に担当者が参加している。その会議などを活用しながら、学校に多く来ていただく機会を検討している。



★ ふるさとのよさを発見しよう～岩国の城下町と錦帯橋～

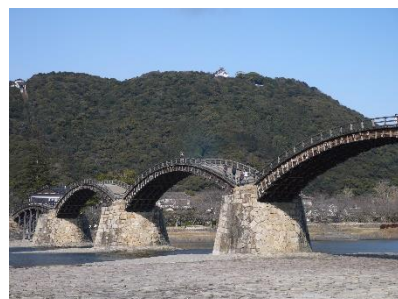
ふるさとのよさを発見し、ふるさとへの愛着心を深める子ども

岩国の城下町や錦帯橋の歴史について調べる活動を通して、ふるさとのよさを発見し、ふるさとへの愛着心を深める。

教材について

錦帯橋は日本三名橋の一つで、五つの反り橋で成り立っている。アーチ型でこれほど長く美しい木の橋はめずらしく、日本だけでなく、世界に自慢できる橋である。また、錦帯橋の周りには岩国藩主吉川氏が築いた岩国城や城下町などの古い町並みが残されている。

このような城下町や錦帯橋について調べることで、「暮らしやすい町を作りたい。」「流されない橋を作りたい。」という先人たちの強い思いや努力について知ることができる。このことを通して、子どもたちはふるさとのよさに気づき、ふるさとへの誇り、愛着を深めることができると思う。



錦帯橋と岩国城

展開例

学習の流れ

- ① 岩国の城下町の歴史や錦帯橋の特徴について話を聞く。
- ② 講話で聞いたことをもとに、さらに知りたいことをグループごとに調べ、まとめて発表する。
- ③ 5分の1サイズの錦帯橋の模型を作る。
(保護者・地域の方も参加)
- ④ 錦帯橋、お城山、岩国城を散策する。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 岩国市徴古館の学芸員を講師に招き、話をしていただく。
- ◇ 学校公開日に発表会を設定することで、相手を意識した分かりやすい内容、方法等について考え、工夫できるようにする。
- ◇ 市役所錦帯橋課の方の指導の下、木を組み合わせて橋ができることを体験させる。
- ◇ 実際に歩いてみることで、城下町のつくりや錦帯橋の大きさを体感させる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

ふるさと学習の意義・内容について全教職員で共通理解するとともに、保護者や地域の方にも、ふるさと学習に関連する講話や発表会、体験学習に参加していただくよう呼びかけたり、活動の様子を学校便りで知らせたりして、共にふるさとのよさを実感できるようにした。

④ 体験的な学習の充実

錦帯橋の模型作りを通して、様々な形の木のパーツが使われていることや、それを順に組み合わせていくことでアーチ型の橋ができあがることを体験することができた。この模型には子ども4人が乗ることができ、昔から伝わる組木の技法のすばらしさを実感することができた。

⑤ 外部人材の活用

岩国市徴古館の学芸員を招いて、地域の歴史について専門的な話を聞いた。また、錦帯橋の模型作りでは、市役所の錦帯橋課の方を講師に招いた。どちらも、子どもたちがより深い知識や理解を得るために大変効果的であった。

⑥ 校種間の連携

中学校区5校で、共通してふるさと学習を実践している。全ての小学校で、錦帯橋を中心に岩国地区の歴史や文化を学んでいく。そして中学校でのより深い学びや、観光アピール等の情報発信へとつなげている。

★ 大道の歴史を伝えるものに親しもう～大道人形浄瑠璃～

地域の伝統文化を受け継ぎ、地域の一員として行動する子ども

人形浄瑠璃について理解を深める活動を通して、ふるさと大道への誇りや愛着を抱き、伝統や文化を継承し発展させようとする意欲や態度を育むことができる。

教材について

大道人形浄瑠璃は、江戸時代以前から伝承されている。現在でも、大道人形浄瑠璃保存会の方々により継承され、様々な行事等で公演されている。

大道人形浄瑠璃を守る保存会の方々から、歴史や伝統を守る思いや願いを聞くことで、ふるさとに愛着をもち、後継者として関わりたいという思いを育むことができる。



展開例

学習の流れ	単元づくり・授業づくりのポイント
<ul style="list-style-type: none"> ① 大道人形浄瑠璃の歴史を知ろう。 ② 人形の遣い方・語り方を追求しよう。 ③ 保存会の方々の思いを知ろう。 ④ 伝統文化を受け継ぐために、発表会を開こう。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 実物の人形を見ながら、歴史やあらすじを聞くことにより関心・意欲をもつ。 ◇ 保存会の方々が講師となり、活動の流れや役割分担を決める。また、継続的に指導を受けることで、人形の遣い方・語り方を身に付ける。 ◇ 保存会の方々との交流を通して地元にある伝統文化に誇りをもち、発表会への意欲をもつ。 ◇ 保護者や地域の人、下学年の児童を招いて発表会を行い、引き継いでいく思いや願いを伝える。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
浄瑠璃に使う人形を校内に常設展示し、児童、保護者、地域の方の大道人形浄瑠璃に対する興味・関心を高めるようにしている。
地域・保護者・下学年児童に向けて発表会を行う。
- ② **教育課程への位置付け**
5・6年生の総合的な学習の時間に位置付け、計画的に実施する。3・4年社会科（地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事）や、5・6年道徳「郷土愛・愛国心4－(7)」と関連を図る。
- ④ **体験的な学習の充実**
大道人形浄瑠璃保存会の会員の方に指導をしていただくことにより、語りや人形遣いを学ぶだけでなく、地域の伝統を受け継いでいこうとする思いや願いをもち、ふるさとを愛する心の育成につながるようにする。
- ⑤ **外部人材の活用**
大道人形浄瑠璃保存会の会員の方に講師として、歴史や人形遣いの指導を依頼する。
- ⑥ **校種間の連携**
大道中学校における「ふるさと大道を再発見しよう」（総合的な学習の時間）への充実・発展につながるようにする。

★ 柳井市の未来・住民の幸福について考える

ふるさとのよさを発信し、ふるさとを愛する心を育む子ども

ふるさとに伝えられてきた伝統工芸のすばらしさを知り、それを主体的に発信する試みを通して、ふるさとを愛する心を育む。

教材について

柳井縞は、木綿糸をつかった縦縞模様の織物で、江戸時代から伝えられてきた伝統工芸である。大正時代、国内の織物業衰退により、一旦途絶え、「幻の織物」と言われていた。平成6年「柳井縞の会」が発足し、以来復興をめざし織の技術の習得が進められている。また、柳井商工高等学校は2014年から柳井縞機織機の製作に取り組むとともに、商品開発など、新たな視点で柳井縞を次世代に伝えようという試みを進めており、小学校との連携にも取り組んでいる。



また、柳井市では、2016年度より「柳井市の未来・住民の幸福とは？」ということについて、6年生が主体的に考えるという取組をしている。

今回、柳井縞の共同制作に柳井縞の会・柳井商工高等学校にも関わっていただいた。三者の交流により、様々な世代の思いに触れながらまちの未来について深く考え、ふるさとを愛する心を育むことができると考えた。

展開例

学 習 の 流 れ	単元づくり・授業づくりのポイント
<p>① 交流学习1</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柳井縞の歴史と文化を学ぶ。 ・柳井商工高のまちづくりやものづくりの活動について知る。 ・機織と柳井縞のデザインを体験する。 <p>② 交流学习2～8</p> <ul style="list-style-type: none"> ・柳井縞制作に取り組むとともにそれをういた商品開発についての話し合いをし、制作する。 <p>③ これからの柳井</p> <ul style="list-style-type: none"> ・未来の柳井市をイメージし、自分たちの主体的な関わりについて考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 柳井縞について、事前に調べ学習をし、学習への意欲をもたせる。 ◇ 学んだことや気付き、疑問点等は活動ノートに書き、必要に応じて振り返ることができるようにする。 ◇ 高校生や地域の方とのコミュニケーションを通して、柳井のよさや伝統の継承の大切さを共有し、実践への意欲を育む。 ◇ 柳井縞を軸にまちおこしを考えて発表し、地域の方と話し合う時間をもつ。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

- ① **学校全体での共通理解**
柳井縞制作・交流学习の計画について校内で情報および意識の共有を図るとともに、本取組が6年間のキャリア教育の集大成であることを共通理解した。
- ② **教育課程への位置付け**
柳井縞制作（総合的な学習の時間）を軸に、国語科の「まちの幸福論」、総合的な学習の時間「プレゼンテーションの作成」、学習発表会での発表「まちの幸福論」を位置付け、関連付けながら取組を進めることにより、学習効果の相乗作用を図ることとした。
- ④ **体験的な学習の充実**
柳井商工高の機織機の製作や商品開発、柳井縞の会の方の取組など、様々な努力や思いをしっかりと学ぶとともに、振り返りの時間を確保することで、体験を通してよさや伝統の継承の重要性に気付くことができるようにした。
- ⑤ **外部人材の活用**・⑥ **校種間の連携**
 - ・柳井商工高（柳井縞の歴史と文化・まちづくりとものづくり・機織体験・柳井縞のデザイン）
 - ・柳井縞の会（柳井縞の歴史と文化・柳井縞の糸組み・機織体験の指導）
 - ・地域の方々（発表後の話し合い）

★ 田布施の未来を考える会

地元を愛し、将来を考える子ども

将来を担う子どもたちに、町長から田布施町の未来像について熱く語ってもらうことを通して、自分の未来像を考えたり、地域を愛する心を深めたりする。

教材について

地域協育ネット夏季研修会における熟議の結果、「子どもに田布施のよさをもっと知らせたい。」「田布施町の将来ビジョンを大人が子どもに伝えるべき。」という意見が多数あった。そこで、町長から田布施町の未来像を語っていただいた後、児童によるグループワークをすることを通して、田布施町の将来像について夢を膨らませると同時に、そこに自分の姿を重ねることができるのではないかと考える。



展開例

学習の流れ

- ① 田布施町長のお話（20分）
子どもに伝えたい田布施の魅力と未来像
- ② 子どもたちのグループワーク（5分）
お話を聞いた感想をグループで交流する。
- ③ 町長さんに質問（10分）
もっと知りたい、詳しく教えてほしいこと
- ④ 本時の振り返り（10分）
一人ひとりがまとめる。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 事前に田布施のよさについて個人でも考えさせておく。
- ◇ 特に、もっと知りたいことについて詳しく話すよう指示する。
- ◇ グループでの交流を生かして、質問をさせる。
- ◇ 将来の田布施に自分はどのように関わっていくべきかを考えさせる。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

② 教育課程への位置付け

夏季休業中の熟議を受けての開催のため、年度当初の計画には入っていなかったが、自分の将来について考える「未来に向かって」の単元の中に位置付けた。

③ 学習過程の工夫

幸せで安心安全な町づくりのために何が必要なかを町長から直接聞くことで、自分にも何かできないだろうかと考えたり、田布施についてもっと知らなければならないという思いを新たにしたりすることができた。また、3月に迎える卒業式での「万志録」に向けて、将来自分はどのような人間になりたいのかについて、考えるきっかけにもなった。

⑤ 外部人材の活用

町のリーダーとして町政にあたる思いを、町長が直接小学校に出向いて話ができるという小さな町ならではの利点を生かすことができた。

⑥ 校種間の連携

今後は、他の小学校や中学校でも実施していく予定である。児童生徒の振り返りについては、学校運営協議会や地域協育ネットの熟議等の場で共有する。

★ 下松市の偉人！長岡外史について調べ、伝えよう！

地元で誇りや愛着をもつ子ども

地元下松市中村地区の偉人として伝わる長岡外史について調べ、保護者や下級生、地域の方に発表する活動を通して、地元で誇りや愛着をもつことができるようにする。

教材について

長岡外史は、下松市中村地区に伝わる偉人である。外史はその生涯をかけて、人々の豊かで幸せな暮らしの実現のために尽力した。

数々の功績とともに、「おれはいつも50年先を見ている。」「人を肩書で判断してはならない。」などの言葉も残しており、児童は、自分のことだけでなく、人のために働くことの素晴らしさや大切さを学ぶことができる。

外史の実家は、校区内にあるため、児童にとって身近に感じやすく、また、興味・関心をもちやすく、教材として適している。

身近な偉人について調べ、発表する活動は、自分の生き方と照らし合わせ、人としての生き方について学ぶことにもつながると考える。



展開例

学習の流れ

- ① 長岡外史について調べ、新聞づくりを行う。
- ② 発表に向けて、グループで計画を立て、準備や練習を行う。
- ③ 保護者や地域の方、下級生に向けた発表を行う。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 地元の方を招き、児童を対象とした講演を行っていただく。その後、質問タイムを設けることにより、課題解決に対する児童の意欲を高めることができるようにする。
- ◇ 各種資料やインターネットを用いて、調べ学習を行うことにより、自分のグループに必要な情報を取捨選択することができるようにする。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

③ 学習過程の工夫

個人による新聞づくりを経た後にグループ発表を行うことで、個から集団への活動の広がりを意識した。

④ 体験的な学習の充実

遠足で、長岡外史の像や石碑を実際に見ることにより、学習への意欲付けを行った。

⑤ 外部人材の活用

長岡外史について研究している地域在住の「長岡外史顕彰会」の方に講演をしていただくことで、児童は興味や関心を一層強め、地域に対する誇りや愛着をもつことができた。

★ 受け継ごう、地域の伝統芸能！ ～徳地子ども人形浄瑠璃～

地域の伝統文化に対する理解を深め、継承しようとする子ども

自分の生活している地域の歴史を学び、地域で継承されている伝統文化に対する理解を深め、継承活動に意欲的に取り組むことができる。

教材について

徳地人形浄瑠璃は、明治初期から現在まで伝承される県の無形文化財の一つである。

徳地子ども人形浄瑠璃は、本校の伝統的な教育活動として30年以上にわたって取り組まれてきた学習である。上演演目は、「絵本太功記『尼崎の段』操さわりの場」である。

語りは、人形浄瑠璃の特徴的な要素の一つであり、台本として昔から大切に伝えられてきたものである。言葉や抑揚が日常的なものではなく習得が難しいが、毎年下学年が6年生の演じている姿を見てきているため、それを生かして短い時間で練習・習得ができるという好循環が生み出されている。



展開例

学習の流れ

- ① 徳地人形浄瑠璃について話を聞き、人形、三味線、附打ちを体験する。
- ② 役割（語り、人形、三味線、附打ち）を決め、同じ役割で教え合いながら練習する。
 - ・全員が語りを暗唱できるように練習する。
 - ・グループごとに浄瑠璃について調べたことや地域へのインタビューをまとめる。
- ③ 上演会の案内状やポスターを作成する。
- ④ とくち伝統芸能まつりと、人形浄瑠璃上演会の2回、保護者や地域の方に成果を発表する。

単元づくり・授業づくりのポイント

- ◇ 保存会の方々の地域や浄瑠璃に対する思いをしっかり受け取る。
- ◇ 適性を考えながら自分の役を決め、友達と協力して楽しみながら練習する。
- ◇ DVDを活用して、暗唱する。
- ◇ グループごとに、上演会で発表したい内容を話し合い、自分たちで計画・実行し、まとめる。
- ◇ 上演を通して達成感を味わうとともに、保存会の方々への感謝の気持ちを持ち、地域の方々の気持ちを感じ取る。

伝統や文化に関する教育の充実に向けて

① 学校全体での共通理解

徳地の伝統文化である子ども人形浄瑠璃は、30年以上も続く活動で、現在は6年生が行っている。児童にとっては、6年生になったら浄瑠璃ができるという思いがあり、最高学年としての自覚をもつよい機会となっている。下学年にとっては、学習に取り組む6年生の真剣な姿を見ることができるよい機会となっている。

③ 学習過程の工夫

上演会に向けての広報の仕方について考えたり、上演会では、来場者と人形操りを通しての交流をしたり、地域の方々の浄瑠璃に対する思いのアンケート結果を発表したりして、児童に、ふるさと徳地のよさについて考えさせながら授業を展開している。

⑤ 外部人材の活用

徳地人形浄瑠璃保存会の方々を指導者として招き、練習に取り組んでいる。指導者の熱心な指導のおかげで、語り、人形操り、三味線とそれぞれの役割を立派に果たしている。子どもの姿が、ふるさと徳地の元気と笑顔につながっている。